２．鳥類

⑴ 調査概要

1）調査方法

重要なハビタットとして、ＲＤＢ掲載の複数種が生息する、希少かつ特殊な環境を選定した。ただし、牛深沖の島には、ＲＤＢ掲載種はウチヤマセンニュウとカラスバトの２種だけが該当するが、県内ではここ１ヶ所しか生息地が無く、特殊性が高いために、注目していくべきハビタットとして選定した。

2）調査結果の概要

阿蘇北外輪山・端辺原野には、西日本ではほぼここ周辺にしか生息しないコジュリンやオオジシギ、コヨシキリが見られる。しかし、いずれも個体数が多くはない。生息地が人為的な環境に依存しているため、定期的な草刈りや野焼きなどを継続していく必要がある。

有明海干潟及び八代海（不知火海）干潟の環境は、堤防工事や埋め立てなどにより、鳥類の生息地が一気に消滅する危険にさらされている。今回も、八代海（不知火海）沿岸の堤防工事が進んでおり、またスパルティナ属植物の一種の生育地が爆発的に広がっており、確実に生息環境としては悪化していた。

九州中央山地は、シカの食害により全般的に林床植生が非常に貧弱になり、それに伴い高木層も枯死や倒木が目立つようになってきた。山頂風衝林と呼ばれるような林は壊滅し、草原化しつつある。今後、森林性鳥類群集、特に高標高地に生息する鳥類群集に多大な影響が現れることが懸念される。

牛深沖の島は、現在のところ安定していると思われるが、1ヶ所で範囲が狭いために注視していく必要がある。

3）今後の課題

いずれのハビタットも他に代替する場所がないために、その環境が悪化・消滅すれば、そこを棲み処としていた鳥類は生息できなくなる。したがって、これらの環境が確実に維持されるように保全対策を講じていく必要がある。すでに、国見岳の山頂付近の植生は、シカ食害によりほぼ破壊されており、メボソムシクイなど高標高地に生息する鳥類は極端な減少もしくは絶滅しているとみられる。特にシカ食害防止対策及び表土流出防止策等を施し、植生を回復させていくことが望まれる。

⑵ ハビタットの解説

5ヶ所について、以下で解説する。

1 国見岳
山都町、八代市泉町

熊本県カテゴリー
4　緊急に対策が必要

【 保護対象種 】
クマタカ（VU）、コマドリ（CR）、ホシガラス（AN）
【 選定基準 】
B 県内において極めて稀な種が生息しているハビタット
E 特殊な立地（砂丘・断崖地・塩沼池・湖沼・河川・湿地・高山・石灰岩地・洞窟・干潟・岩礁など）に特有な種が生息しているハビタット
【 概 要 】
九州中央山地は、標高が 1,600m を超える山々が連なり、九州本島では最も標高が高い山域である。国見岳（1,739m）はその中心部に位置する代表的な山で、標高 800m 以下の領域には常緑広葉樹林が発達するが、標高 800m 以上の領域には夏緑広葉樹が発達している。代表的なブナ林の他、モミ・ツガ林やシオジやサワグルミなどの渓谷林も発達している。これらの森林は、ホシガラスなど標高の高い山域に生息する鳥類にとって貴重なハビタットとなっている。
【 現 状 】
高標高地に生息する鳥類としてはホシガラス、コガラ、ヒガラなど、森林性の鳥としてはクマタカ、ジュウイチ、ツツドリ、ヤマドリ、オオアカゲラ、コマドリなど、渓谷を好む鳥としてはアカショウビン、オオルリ、カワガラス、ミソサザイ、ヤマセミなどが確認されている。これらの種が、断片的ではなく、ひとまとまりとして生息している。しかし、この一帯はシカの食害によって、低木層や草本層が無くなり、林床の乾燥化とともに高木層の枯死も目立つようになってきた。早急に手を打たなければ、これらの森林環境に依存して生息する鳥たちは絶滅する可能性がある。

2 阿蘇北外輪山・端辺原野
阿蘇市

熊本県カテゴリー
3　対策が必要

【 保護対象種 】
オオジシギ（EN）、コヨシキリ（LP）、コジュリン（CR）
【 選定基準 】
A 国内において極めて稀な種が生息しているハビタット
B 県内において極めて稀な種が生息しているハビタット
H 熊本県版 RDB・RLにおいて、絶滅危惧又は準絶滅危惧とされる種を含むハビタット
【 概 要 】
熊本県の特殊性を特徴づける鳥類にとって重要なハビタットの一つとして、端辺原野や波野原野などの阿蘇外輪山上の山地草原があげられる。当該地域には、短茎草原や長茎草原、牧草地などがモザイク状に分布し、阿蘇の草原を代表する景観を形作っている。ここに夏鳥として渡来するコジュリンやコヨシキリ、オオジシギは九州でもこの一帯でしか繁殖しない。コジュリンとコヨシキリの個体数については、数十つがい程度と安定的に推移しているものと考えられるが、採草地などの短茎草原で繁殖するオオジシギの渡来数は減少傾向にあると推定されている。また、草原への依存性の高いホオアカやその周辺環境に生息するホオジロやセッカなどの鳥類を宿主とするカッコウやホトトギスなどのほか、草原性のネズミ類を餌とするノスリも少なからず繁殖している。
【 現 状 】
このようなハビタットは、定期的な採草や放牧、火入れなどの人為によって維持されてきた。しかし、近年の農業形態の変化で、草原管理が放棄されて遷移が進行し、森林へと移行しつつあるところが増えている。過去にも、野焼きがされなくなった地域の繁殖地をコジュリンが放棄し、大きく繁殖場所を移動させる事態が生じている。オオジシギは、もともと渡来する個体数が少ないのに加えて、利用する採草地や牧野の環境に大きく依存しているため、長期にわたり安定した繁殖地が極めて少ない。

3 牛深沖の島
天草市牛深町

熊本県カテゴリー
3　対策が必要

【 保護対象種 】
ウチヤマセンニュウ(VU)、カラスバト(VU)
【 選定基準 】
A 国内において極めて稀な種が生息しているハビタット
B 県内において極めて稀な種が生息しているハビタット
H 熊本県版 RDB・RLにおいて、絶滅危惧又は準絶滅危惧とされる種を含むハビタット
【 概 要 】
天草市牛深沖には大小様々な島嶼が散在している。これらの島嶼の一部で、熊本県におけるウチヤマセンニュウの唯一の生息地が確認されている。しかし、その数は、10 つがい以下と推定されている。カラスバトは、2009 年に県内初確認されたのち、営巣（2011 年）を確認。その後、数ヶ所の島嶼で数羽から十数羽が記録されている。
【 現 状 】
ウチヤマセンニュウが生息する島には、近年になってイノシシが進入しているために、植生の変化が懸念されている。狭い面積に多数のイノシシが生息するようになれば、林床植生が貧弱化し、島特有の風衝低木林が生育し得なくなる。それによりウチヤマセンニュウの生息地は一気に絶滅へ向かう可能性が考えられる。カラスバトはアコウやタブノキなどが繁茂する照葉樹林に生息しているが、個体群サイズが小さく、今後ともその生息状況には注意が必要である。

4 有明海干潟
荒尾市、玉名市、熊本市、宇土市など

熊本県カテゴリー
2　破壊の危惧

【 保護対象種 】
シギ・チドリ類、クロツラヘラサギ(EN)
【 選定基準 】
A 国内において極めて稀な種が生息しているハビタット
B 県内において極めて稀な種が生息しているハビタット
E 特殊な立地（砂丘・断崖地・塩沼池・湖沼・河川・湿地・高山・石灰岩地・洞窟・干潟・岩礁など）に特有な種が生息しているハビタット
【 概 要 】
有明海は閉鎖性の強い内湾であり、広大な干潟を有している。その面積は全国の干潟面積の約 50%にものぼる。これらの干潟は湾央東側（熊本県、福岡県）と湾奥（福岡県～佐賀県）で特に発達している。この地域における干潟は、一級河川の菊池川や白川、緑川の河口に発達している砂泥質の干潟である。これに対して、湾奥の干潟は泥質である。これらの干潟には、春と秋の渡りのシーズンになると、数千羽のシギ・チドリ類が中継地として渡来する。
荒尾干潟は 2012 年（平成 24 年）、ラムサール条約湿地に登録され、東アジア・オーストラリア地域渡り性水鳥重要生息地ネットワークの一角を占めている。
【 現 状 】
日本国内で記録されている 74 種のシギ・チドリ類のうち、58 種が有明海沿岸で確認されている。これらの種の大部分は渡り鳥で、春秋の渡りの時に日本の干潟に飛来する。有明海沿岸では、春の渡りにはハマシギ(NT)、ダイゼン、チュウシャクシギ、オオソリハシシギ(VU)、アオアシシギなど 23 種が記録されており、秋の渡りではハマシギ、ダイゼンをはじめとして 34 種が記録されている。また、国際的に希少なクロツラヘラサギについては、国内および県内の越冬数は増加傾向にあるが、ユーラシア大陸東岸に分布する繁殖地の開発が進んでおり、依然として予断は許さない状況にある。

5 八代海（不知火海）干潟
宇城市、八代市など

熊本県カテゴリー
2　破壊の危惧

【 保護対象種 】

クロツラヘラサギ（ＥＮ）、ズグロカモメ（ＮＴ）、ツクシガモ（ＮＴ）

【 選定基準 】

Ａ 国内において極めて稀な種が生息しているハビタット

Ｂ 県内において極めて稀な種が生息しているハビタット

Ｅ 特殊な立地（砂丘・断崖地・塩沼池・湖沼・河川・湿地・高山・石灰岩地・洞窟・干潟・岩礁など）に特有な種が生息しているハビタット

【 概 要 】

八代海（不知火海）には球磨川河口や湾奥部の氷川・大野川などの河口域に広大な干潟が広がっている。特に湾奥部の干潟は県内の他の干潟よりも泥質であるために、生息する生物も砂質干潟とは異なっており、渡来する水鳥も異なっている。特に、クロツラヘラサギやツクシガモ、ズグロカモメは、県内の有明海よりも数多く渡来する。東アジア・オーストラリア地域渡り性水鳥重要生息地ネットワークの一角を占める。

【 現 状 】

八代海（不知火海）湾奥部の干潟は、泥質でムツゴロウやカニ類などの他、底生生物が豊富に生息しているために、多くのシギ・チドリ類の他、国際的に希少なクロツラヘラサギや有明海・八代海（不知火海）の準特産種であるズグロカモメ、ツクシガモが毎年渡来し越冬する。県内の他地域に比べ、大野川・砂川河口域には、ズグロカモメ、ツクシガモが多い。しかし、大野川河口一帯は、ヒガタアシ（スパルティナ属の一種）が猛烈な勢いで広がっているために、急速に干潟が減少しつつあり、危機的な状況である。

(3) 文献

1. 熊本県希少野生動植物検討委員会（1992）九州中央山地における希少野生動植物の実情と保護方策調査報告書．熊本県環境保全課.
2. 熊本県希少野生動植物検討委員会（1993）人吉・球磨地域における希少野生動植物の実情と保護方策調査報告書．熊本県環境保全課.
3. 熊本県希少野生動植物検討委員会（1994a）天草地域における希少野生動植物の実情と保護方策調査報告書．熊本県環境保全課.
4. 熊本県希少野生動植物検討委員会（1994b）芦北・水俣地域における希少野生動植物の実情と保護方策調査報告書．熊本県環境保全課.
5. 熊本県希少野生動植物検討委員会（1995）阿蘇・県北地域における希少野生動植物の実情と保護方策調査報告書．熊本県環境保全課.
6. 熊本県希少野生動植物検討委員会（1996）県央地域における希少野生動植物の実情と保護方策調査報告書．熊本県環境保全課.
7. 熊本県希少野生動植物検討委員会（1998）熊本県の保護上重要な野生動植物 －レッドデータブックくまもと－ ．熊本県自然保護課.
8. 熊本県希少野生動植物検討委員会（2009）改訂・熊本県の保護上重要な野生動植物 －レッドデータブックくまもと 2009－ ．熊本県自然保護課.